土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No.15 2000.8.

目　次

土木史ニュース	西田橋が石橋記念公園で再デビュー	長谷場　良二	1
フォーラム	「近代土木遺産調査報告書」のまとめにあたって	榛澤　芳雄	2
地域のニュース	野蒜築港の保存と地域活性化運動について	後藤　光亀	3
	東山道武蔵路の保存工事終わる	武部　健一	3
海外土木史	国際会議参加報告　ICOHTEC'99	小林　一郎	4
関連団体ニュース	「土木の文化財を考える会」の活動と今後への期待	久保田　稔男	5
文化財ニュース	重要文化財・登録文化財となった土木構造物一覧		5
学会の動き	「土木学会選奨土木遺産」の発足と『日本の近代土木遺産』の刊行	馬場　俊介	6
	土木史研究委員会平成12年度名簿		6
	土木史フォーラム小委員会平成12年度名簿		6
	第21回土木史研究発表会論文募集要項		7
行事案内	ふりむけば未来！世紀を越えて　近代化産業遺産全国フォーラム		7
	全国近代化遺産活用連絡協議会シンポジウム		7
土木史関係図書	『国土を造った土木技術者たち』他		8

土　木　史　ニ　ュ　ー　ス

西田橋が石橋記念公園で再デビュー

江戸時代の代表的な多連アーチ石橋群として知られた鹿児島市の甲突川五石橋。その一つ西田橋を移築して、整備を進めてきた石橋記念公園が本年４月25日に開園した。1993（平成５）年の8.6水害後、五石橋のうち流失を免れた西田橋、高麗橋及び玉江橋の３橋は、保存策についての激しい議論の末、河川改修に合わせて移築して保存することとなったものである。移築は、文化財や土木工学等の専門家からなる調査委員会の指導、助言を得ながら進め、石組みの仕様や石工岩永三五郎独自の工夫など多くの知見を得た上で、創建時の姿を基本に復元された。

石橋本体は、1910（明治43）年に橋面の太鼓状にきつい勾配を緩くする大規模な改修が実施されていたが、明治初期の写真や現場に残された痕跡を基に、橋面の円弧に４連の二重アーチ(外輪アーチは壁石)の円が内接するという元々の意匠を再現している。また、甲突川河床と同様に軟弱な基礎地盤の処理については、様々な意見があったが、解体前のアーチ基礎に10～20cmの不陸が認められ、その原因も特定できないことなどから、地盤の免震効果を考慮して上層10mだけ砂杭で地盤改良した上で、ＲＣ床版による人工地盤を設けることとし、その上に甲突川の川砂を敷いて、梯子胴木など伝統工法を再現している。これら事業成果の一部については、五石橋の歴史的変遷を含め、土木史研究No.16～18に掲載された。

今回の移築にあたっては、アーチ形状に加工したＨ形鋼を櫛形に配置した支保工を用い、クラウン部をジャッキにより上下してアーチ弧長を変えられる構造にした。解体に先立ち実橋載荷試験を行って石橋構造特性の解析を試み、解体時の除荷や復元時の載荷に伴うアーチ変位の観測、アーチ閉合後のアーチ石合端の挙動観測、さらには写真測量の活用など「科学的な手法」を用いるよう努めた。しかし一方では、人力で加工された空積みの石造物の復元が、最終的には石工の「職人技」と根気のいる作業に負うところが大であることを改めて知らされることになった。

桜島を眼前に望む地に復元された西田橋。川の対岸には高麗橋、玉江橋が移築され一体的な公園となっている。開園以来、公園には人工の流れや砂洲で遊ぶ親子連れの姿が見られ、また、西田橋傍には五石橋の歴史や技術等を伝える記念館と昔を偲ぶ御門も併設されて、1ヶ月で約3万人の来園者があり、小中学生の体験学習の場にも活用され始めている。

（鹿児島県土木部　長谷場 良二）

移築された西田橋

近代土木遺産調査報告書」のまとめにあたって

榛澤　芳雄（日本大学教授）

今回文部省科学研究費報告書「重要度の高い近代土木遺産の技術的・意匠的・系譜的評価」をまとめるにあたり、土木学会近代土木遺産調査小委員会の各先生方のお力添えをいただいたことに深く感謝いたします。

窪田陽一土木史フォーラム小委員長から科研の苦労話についての依頼がございました。

丁度私が土木史研究委員会をお手伝いすることになりましたのは、新谷洋二教授が委員長の時でした。幹事長を務めさせていただき、上智大学アジア文化研究所長の石澤良昭教授がアンコールワット遺跡保存にご尽力なされているときで、土木学会として何が協力できるかを議論していた最中でした。資金面の協力として近代設計の遠藤輝夫氏にご協力いただき、人材面の協力として馬場俊介教授にアンコールワットの遺跡調査に行っていただきました。時は近代土木遺産調査の走りである東海五県の調査のときでした。お忙しいときに時間を割いていただき、精力的に遺跡のデータを取り、現状を報告していただきました。確かにアンコールワットは世界的な遺産として大事ですが、日本にも調査しておくべき重要な土木構造物が数多くあるのではということで、新谷委員長の下で馬場教授を中心として全国を対象とした近代土木遺産調査を始めました。資金面につきましては新谷教授がご尽力され、平成５年度から平成８年度まで文部省科学研究費補助金を、そして平成８年度に日本大学総合助成金を受け、今回の報告書にこぎつけました。

調査範囲は全国各地に及ぶことから、調査ご担当の先生方にはわずかな資金のみで調査されたこと、恐縮に思っております。この場を借りて先生方と関係機関各位の献身的なご協力に感謝申し上げます。

調査方法やデータ整理の仕方等については、馬場教授の東海五県の調査結果がございましたので、割合、全国の先生方に統一した指示でお願いできました。全国調査の第一段階（平成５～８年度）は、近代土木遺産のデータ収集であり、その収集したデータの取り扱い方の問題が何度も委員会で検討されました。

平成９年に平成８年度日本大学総合研究報告書ができ、先生方の写真と調査データを私どもが保管することになりました。保管している大切な資料やデータを利用する方法として、私どもの船橋校舎で管理するよりも、東京にということで、丁度私どものＯＢの小平耕三氏のご厚意により、事務所に土木史研究センターを設置させていただきました。場所は、秋葉原駅に近く、皆様が東京での会議の折に立ち寄って閲覧できるようにいたしました。これにより資料の精度向上を図りました。その後、平成11年にそこを閉めることになり、資料は足利工業大学為国孝敏助教授の研究室に移しました。

第２段階（平成８～11年度）は、近代土木遺産の評価であり、自然、風土、社会・経済環境の相違や、各県の状況を考慮して判断していただき、全体的に統一させていただきました。これはあくまでもたたき台であり、今回作成したCD-ROM日本近代土木遺産総覧（土木学会近代土木遺産調査小委員会編）を基にして、将来、データの精度を向上させた上で日本近代土木遺産総覧を完成していただければ幸いです。

昨今、東京都国分寺市においては古代東山道武蔵路の遺跡、新潟県朝日村においては古代の河川改修工事の遺跡が発掘されるなど、土木構造の遺構が掌握され、専門家の研究によって次第に明らかにされてきています。しかし、その発掘された遺構が歴史的文化財として、どのように修復・保全すべきかどうかという基準がまだ確立されていないと思います。

土木構造物は、存在そのものが地域文化を創出させるとともに、われわれの生活環境に密接に関わってきたものです。そこには、さまざまな自然環境の中で、先人達が積み重ねてきた知恵と知識の集大成であります。そこにはさまざまな創意工夫の発想の中で困難を克服して技術を発展させてきた歴史があります。高度に成熟した現代社会、現代技術が忘れかけようとしている事柄が見いだせるものと考えます。その時代時代の文化を支えてきた土木構造物を正しく評価し、将来の土木工学の発展に継承していくことが極めて重要であると改めて認識いたしました。

最後に、歴史的構造物の掌握と修復・保全の基準と方法の確立を期待し、今回の調査報告がそれらに役に立つことを祈ります。

地　域　の　ニ　ュ　ー　ス

野蒜築港の保存と地域活性化運動について

野蒜築港は、我が国最初の近代港湾の築港事業であり、明治政府の直轄事業として宮城県鳴瀬町の鳴瀬川河口部に計画され、1878（明治11）年に着工されました。しかし、1884（明治17）年の台風で内港の突堤が崩れ翌年に築港事業は中止となります。着工以来120年が経ち、残されたものは旧市街地跡に残された煉瓦構造物群、石井閘門、北上運河や東名運河などで、地元での記憶も急速に失われようとしています。

土木学会東北支部では、1998（平成10）年より「土木の日」の関連事業として「野蒜築港120年委員会」を設け、同年11月に鳴瀬町で「野蒜築港120年フォーラム」を、1999（平成11）年6月に築港の地元である浜市小学校において「野蒜築港120年シンポジウム」を開催し、地元の人達との交流と情報・意見交換を行いました。その後、貴重な公文書の発見、東名運河の遺構調査、高校生による築港跡の測量調査、当時の土木技術に関する情報収集と解析などが行われました。同年11月に仙台において第2回「野蒜築港120年フォーラム」を開催し、さらに2000年（平成12年）6月に再度鳴瀬町の鳴瀬第二中学校において明治三大築港である三国港と三角港の方々の参加をいただき第2回「野蒜築港120年シンポジウム」を開催し、延べ700名の参加を得ることができました。

野蒜築港は、「近代化遺産」としての適切な保存について早急な取り組みが必要であり、「土木史」的な観点からの評価も土木学会としての責務であると考えています。一方、鳴瀬町を中心に全国に根強い「野蒜築港ファン」が存在し、郷土の歴史を生涯学習のテーマとすることや小中学校での総合学習への取組み、県内の工業高校の生徒を対象として土木をより深く理解するための講座の開講、マスコミへの広報によって幅広い人達の関心を高め、地域つくりへの活用等、さまざまな活動の広がりと可能性が見えてきました。土木の専門家集団としての土木学会が地域に根ざした活動に協力することによって土木への理解を深めていただくと共に、今後とも息の長い活動として継続されていくことを願っています。

（東北大学　後藤　光亀）

野蒜築港120年委員会ホームページ：
http://www.civil.tohoku.ac.jp/~goto/nobiru/

東山道武蔵路の保存工事終わる

1996（平成8）年に土木学会土木史研究委員会が他の考古学関係学会等と連携して保存運動を成功させた、東京都国分寺市の「東山道武蔵路遺跡」の保存工事（「土木史フォーラム」№2参照）が、今年4月ほぼ完成し、遊歩道として一般供用された。

この遺跡内で発掘された道路遺構は、国分寺市の旧鉄道学園跡地の住宅造成予定地で発掘されたもので、両側に側溝を持つ幅12mの堂々たる直線大道であった。その長さは330mにおよび、7世紀の古代「東山道」の遺構としてきわめて貴重なものである。保存決定によって住宅計画を一部変更し、遺構の上を再び覆土し、敷地内の遊歩道として活用することとなった。このほど完成した舗装工事では、下部に残された両側の側溝部分には明色のカラー舗装がされて、古代の道路の様子が分るようになっており、標識も設置された。遊歩道内に残された桜の大樹が趣を添えている。北側の未完成の部分では、さらに断面形が分るような保存方法も検討されている。

（道路文化研究所　武部　健一）

東山道武蔵路遺構上部の
カラー舗装された遊歩道

国際会議参加報告 ICOHTEC'99

いささか旧聞であるが、昨年夏スイスに近いフランスのベルフォールで開催された26th Symposium of the International Committee for the History of Technology (略称ICOHTEC)の参加報告を行いたい。

この会議の発表内容は技術史全般にわたっているが、今回のテーマは「技術的な選択(Technological Choice)」であった。会議は９つのセッションに別れ、第1セッションでは技術的選択における「経済・政治との関わり」が議論され、第2セッションは「各々の独創的」について発表された。第3から第8セッションでは「社会性」、「自然環境」、「地域性」、「軍事技術」、「工業化」、「芸術」というような様々な要因と技術的な選択との関わりについて論じられた。土木史を含んだ関連は第９セッションで、「化学と製紙」、「輸送機関」、「土木工学と機械製造」、「材料と力学」等のサブテーマの一つとして発表が行われた。特に興味深かった論文として、誰が飛行機を発明したかについて東欧がライト兄弟に先駆けていたのではないかと推論する発表と、20世紀初期のルーマニアの自動車と高速道路の歴史に関するものであった。

筆者はアメリカのDavid Lewis教授（航空技術史）、フランスのGerard Empotoz教授（化学史）とともに、第９セッション共同司会者の一人に指名された。英語もフランス語も片言しか喋れない上、多くの専門外の発表を取りまとめることとなり、冷や汗の連続であったが、これも楽しい経験と居直りトライすることとした。大過なくセッションを終えることができたのは、両教授や北欧、ポルトガルからの参加者の暖かい協力であった。なお、筆者の研究室から１年間の予定で、ベルフォール・モンベリアール工科大学に留学中の山下真樹君が「The Design Aspect of E.Freyssinet in the Construction of St. Michel Bridge」と題した研究発表を行った。

会議は、8月16日から21日まで１週間におよびワイン付きの昼食はもちろんのこと、午後はすべて全員による見学と夕食会が用意されていた。プジョーの博物館見学と博物館内での夕食、ミュールーズの鉄道博物館の見学と大学での歓迎パーティ、ベルフォール要塞の見学と要塞内での夕食、最終日は各自持ち寄った楽器を演奏で、ジャズやクラシックのお別れパーティと連夜大いに盛り上がった。参加者は、家族連れで欧州観光をかねたアメリカや日本からの研究者、定例学会行事に参加した欧州主要国の研究者、そして東欧等欧州の周辺国から自腹を切って参加する研究者や留学生、アフリカや中南米からの留学生たち等様々なお国柄で華やいだ。それぞれ立場が違っても研究者同士の交流は盛んであったし、また周辺の史跡、博物館巡りなどの多くの見学会なども催され、各々がそれぞれに短い夏を楽しんでいた。

さて、本国際会議を通じ、今後、海外の土木史あるいは技術史関連の研究者や国内の技術史、経済史等の研究者との交流は重要なことであると感じた。まずは、本コーナーに個人レベルで、参加した会議の報告を続けていってもらいたいと思っている。また、近い将来には土木史研究委員会主催での、交流会も行えればいいと考えている。

（熊本大学　小林　一郎）

ベルフォール工科大学

ベルフォール要塞での夕食会

関　連　団　体　ニ　ュ　ー　ス

土木の文化財を考える会」の活動と今後への期待

「土木の文化財を考える会」は、1997年に結成された「土木の文化財登録をすすめる会」（本誌６号参照）を前身とし、年２回の勉強会の開催を中心にその活動が行われている。本誌14号で告知したとおり、去る６月24日（土）には、東京・湯島聖堂内斯文会館にて第４回めの勉強会が開催され、梅雨寒の雨模様にも関わらず、多くの参加者が集まった。会の活動を支えている会員の、熱意の表れであるといえるだろう。今回の勉強会では、築貫義人氏（（社）燈光会）による「日本の灯台と歴史的灯台の保全」、並びに寺坂勝氏・奈良豊規氏（青森県（元・前）土木部長）による「『白魔に挑む』－海水による消雪道路と八甲田山の春除雪－」の２題の講演が行われた。講演の概要や勉強会の様子については、後日、同会事務局より正式な記録が公表されることと思うが、前者に関しては、御尊父が灯台守であったという方の興味深い体験談が会場から披露されたり、後者については、実際の春除雪作業の様子がビデオを交えて紹介されるなど、会ならではの特徴ある印象深い勉強会であった。

「土木の文化財を考える会」は市民の会である。勉強会の実施や、会の運営に関わる細かい事務作業は、ボランティアで行われているという。実際一度でも勉強会の会場に足を運んだ経験のある方は、その「手作り」の雰囲気に親しみを感じるだろう。その一方で、登壇する一流の講師陣の顔ぶれには、いつも驚かされる。惜しむらくは、こうした活動が、まだ限られた人達にしか知られていない点である。とくに、学生を始め20代から30代に至る世代の参加者の少なさ。また、専門としては土木に関わることのなかった、普通の市民の参加が少ないことである。本来ならば、しかるべき聴講料を支払ってでも聞きたくなる様な充実した内容の講演であるにもかかわらず、多くの人々がまだその開催を知らないということは残念でならない。折しも過日の勉強会の席上で、事務局から冗談混じりながらも活動資金が底を尽きつつあることが吐露された。今後は１人でも多くの人びとが、この活動に参加してくれることを願いたい。また会の活動自体も新たな展開を模索しているようである。一口に土木の文化財といっても、その種類は多様であり、活動の目指すべき方向は無数にあるように思われる。市民の活動らしく、できるところから手を着け、地味ではあるが、息の長い活動を行っていけるよう期待したい。

連絡先：土木の文化財を考える会
〒171-0032東京都豊島区雑司ヶ谷1-24-14
TEL:03-3988-7733　FAX:03-3988-7747

（国立科学博物館　久保田　稔男）

文　化　財　ニ　ュ　ー　ス

重要文化財・登録文化財となった土木構造物一覧

土木関連重要文化財（平成12年3月答申分）

横利根閘門	茨城県稲敷郡東町	大正10年	内務省直轄事業である利根川改修工事の一環で建設された、我が国で最大級規模の煉瓦造複閘式閘門。
船頭平閘門	愛知県海部郡立田村	明治35年	内務省直轄事業である木曽川下流改修工事の一環で建設された、我が国で最初期の煉瓦造複閘式閘門。

土木関連登録有形文化財（平成12年2月～平成12年4月答申まで）

中の峠隧道	広島県東広島市西条町	昭和5年	深道池貯水用の延長約1.5kmの農業用水路の一部で、全長327m。
四国村石舟のアーチ橋	香川県高松市屋島中町	明治34年	金毘羅街道に架けられていた小アーチ橋で、要石に鯉と唐獅子の浮彫をつける。
四国村江埼燈台退息所	香川県高松市屋島中町	明治4年	淡路島に所在。石造平屋建で、ベランダをもたない初期のタイプの燈台吏員退息所。
四国村鍋島燈台退息所・同倉庫・同西水槽・同東水槽・同北水槽・同日時計	香川県高松市屋島中町	明治6年	もと香川県坂出市与島町鍋島に所在。石造平家建で、正面にベランダを付ける。
四国村クダコ島燈台退息所・同別棟・同表門・同通用門・日時計	香川県高松市屋島中町	明治36年	もと松山市西北方のクダコ島に所在。日本人灯台守用官舎の標準を示す。
呉川眼鏡橋	福岡県田川郡香春町	明治19年	花崗石を整然と布積みした石造単アーチ道路橋。径間は約6m。
仲哀隧道	福岡県田川郡香春町～京都郡勝山町	明治22年	全長432mの道路隧道で、煉瓦積ポータルの坑口を馬蹄形切石積とする。
伊世賀美隧道	愛知県東加茂郡足助町	明治30年	伊那街道伊勢神峠にある長308mの隧道で、2重アーチの石造ポータルを持つ。
百石斎（旧田邉朔郎書斎）	京都府京都市左京区	大正6年頃	田邉朔郎設計になるRC造2階建の土蔵造風書斎。
旧耶馬渓鉄道一号厚ヶ瀬トンネル・同二号厚ヶ瀬トンネル	大分県下毛郡三光村	大正2年	耶馬渓鉄道の第一期工事で建設された、隣接する2本の煉瓦造及び石造隧道。

土木学会選奨土木遺産」の発足と『日本の近代土木遺産』の刊行

土木学会は、平成12年度より優れた土木遺産を顕彰する「選奨土木遺産」の制度を発足させました。土木遺産の文化資産としての価値を社会にアピールし、「先人の熱い思い」を語ることで今の土木技術者に自信と目標を与え、かつ、地域の個性を活かしたまちづくりに活用してもらおう、というのがその目的です。賞の対象となる土木遺産は、構造物単体、もしくは、一つの事業を支えた施設群のいずれでもよく、用途は交通、防災、発電、衛生にとどまらず農林水産、鉱山、一部の産業、軍事など境界領域を広く含むよう設定されています。時代としては、本来なら古代から近代に至る全時代区分を対象とすべきなのですが、当面の間は、学会として責任のもてる選考を行うための客観的なバックデータの整っている近代（慶応～昭和20年）に限定しています（将来全国調査が実施された段階で、近世以前、あるいは、昭和21～30年代へと拡張される予定です）。なお、賞は毎年10件をめどに選考され、他の学会賞より一足早く10月までには決定・公表されます。土木の日（11月18日）の行事の一環として各支部で顕彰活動を行っていただきたいと学会が強く求めているからです。

さて、上記の「責任ある選考」を実施するためのキーとなるのが、『日本の近代土木遺産―現存する重要な土木構造物2000選（土木史研究委員会編）』の存在です。同書は平成12年度の土木学会出版物として刊行されるもので、Ａランクの最重要構造物約400件、それに次ぐＢランクの重要構造物約700件、それ以外のＣランクの構造物約1,100件からなる「21世紀に引き継ぐべき日本の誇る近代土木遺産」の総覧です。先の「選奨土木遺産」は、原則としてＡランクのリスト中から選定されることになっています（リストは選考委員会の場で毎年見直しが行われます）。同書の刊行は、土木学会として成される点に意義があります。すなわち、土木学会が遺産として認定したことにより、これまで、「存在を知らなかった」「一部の人が重要と言っているだけだから」という理由で壊されることの多かった土木遺産ですが、今後は堂々と撤去・更新しにくくなるのではと期待されるからです。逆に、「リストにないから壊す」という使い方をされる恐れもありますが、真に重要なものを守る方が先決と考えて公開に踏み切りました。

（岡山大学　馬場　俊介）

土木史研究委員会平成12年度名簿

委員長	※ 佐藤 馨一	北海道大学大学院	幹事	※ 岡田 一天	プランニングネットワーク 株）
副委員長	※ 市川 紀一	株）クローバーテクノ		後藤 光亀	東北大学大学院
	※ 伊東 孝	日本大学理工学部		佐々木 葉	日本福祉大学
幹事長	※ 小林 一郎	熊本大学		鈴木 圭	鹿島建設 株）
委員	青山 吉隆	京都大学大学院		高安 礼士	千葉県総合教育センター
	石田 正治	中部産業遺産研究会		武田 義見	東京エンジニアリング(株)
	※ 大熊 孝	新潟大学		為国 孝敏	足利工業大学
	河村 忠男	中央復建コンサルタンツ 株）		※ 逆目 英正	ほつま工房 株）
	北浦 勝	金沢大学		※ 原口 征人	北海道大学大学院
	菅 建彦	(財)東日本鉄道文化財団		※ 福井 恒明	東京大学
	※ 竹内 伝史	岐阜大学		藤山 甲太郎	運輸省港湾技術研究所
	※ 馬場 俊介	岡山大学		堀 勇良	文化庁文化財保護部
	※ 松浦 茂樹	東洋大学		安田 佳哉	建設省土木研究所
顧問	五十嵐 日出夫	北海学園大学		※ 山下 正貴	株）地域開発研究所
	榛澤 芳雄	日本大学理工学部			注）※印は新任

土木史フォーラム小委員会平成12年度名簿

小委員長	窪田 陽一	埼玉大学	地域委員	安達 實	真柄建設 株）
幹事長	※ 鈴木 圭	鹿島建設 株）		※ 有井 宏子	大阪府土木部
常任委員	石川 大輔	日本河川開発調査会		市川 紀一	株）クローバーテクノ
	※ 緒方 英樹	財）全国建設研修センター		井上 肇	ジャス･コンサルタンツ 株）
	小野田 滋	財）鉄道総合技術研究所		清水 浩志郎	秋田大学
	高安 礼士	千葉県総合教育センター		進藤 義郎	北海道開発コンサルタント 株）
	※ 田澤 裕子	(株)間組		田中 尚人	京都大学大学院
	※ 橋本 光行	日本鋼管(株)		樋口 輝久	岡山大学
	堀 勇良	文化庁文化財保護部		松山 正將	東北工業大学
	※ 横松 宗治	株）日本設計		宮本 裕	岩手大学
	吉村 伸一	株）吉村伸一流域計画室			
事務局	深堀 清隆	埼玉大学			注）※印は新任

学　会　の　動　き

第21回土木史研究発表会論文募集要項

土木史研究委員会(委員長：佐藤馨一・北海道大学教授)では、来年度の第21回土木史研究発表会(2001年６月中旬の土日予定、金沢大学)を対象とした審査用論文を下記要領にて募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。

1.募集内容：

(1)論文テーマ：自由(時代・対象・範囲等全て自由)。

(2)投稿資格等：①第１執筆者は、土木学会会員に限る。②論文の応募者は、２編以上の審査用論文及び講演用論文（後日募集）の第１執筆者になることができない。すなわち、当該年度の第１執筆者としての発表は１編となる。③過去の研究発表会の講演用論文を次年度以降において、審査用論文へ投稿することは可能であるが、全く同一の講演用論文をそのまま投稿することは認めない。④他の論文集等にすでに登載された、あるいは投稿中の論文は原則として受け付けない。⑤第１執筆者は、研究発表会にて発表し、討議を行うこととする。

(3)論文頁数：12頁以内とする（1頁2550字、9ポイント・25字×51行×2段組)。

(4)使用言語：日本語もしくは英語。

2.応募方法：

(1)投稿申込方法：A4判用紙に「土木史研究、No.21　審査用論文応募」と明記し、①題目(副題も可)、②発表者名・連名者名・所属、③会員番号、④連絡先・電話番号、⑤和文要旨(200字程度)、⑥過去の発表経緯　、⑦キーワード(適宜)を記述して、ＦＡＸまたは郵送にて申込み下さい。投稿申込受付後、執筆要項等を送ります。

(2)投稿申込締切期日：2000年10月2日(月)必着

(3)論文原稿の締切等：

(a)論文原稿締切期日：2000年11月6日(月)必着

(b)査読料：10000円。論文提出時にお支払い下さい。

(c)論文の採否：土木史研究編集小委員会(委員長：伊東孝・日本大学教授)が査読員の判定結果に基づいて決定し、12月下旬に通知します。

(d)本原稿の作成：修正が付された論文(条件付採用)は、修正意見に対応した論文原稿を2001年1月29日(月)までに提出して下さい。採用された論文は、参考意見を勘案のうえ2001年3月30日(金)までに完成原稿を提出して下さい。

(4)論文掲載料：採用確定後に下記の掲載料を請求します。

6頁まで：21000円、8頁まで：28000円、
10頁まで35000円、12頁まで48000円
カラー印刷も可能であるが、実費は著者が負担することになる（1頁あたり50,000円程度）。

3.送付先および問合せ先：　土木学会土木史研究編集小委員会　（担当職員：丸畑明子）
（〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地、Tel.03-3355-3559 / FAX.03-5379-0125、E-Mail : maruhata@jsce.or.jp）

行　事　案　内

ふりむけば未来！世紀を越えて 近代化産業遺産全国フォーラム

日時：平成12年8月18日～20日

8月18日（金）「産業技術の継承」新居浜フォーラム
8月19日（土）近代化産業遺産視察
8月20日（日）全体フォーラム

場所：リーガロイヤルホテル新居浜　ほか

詳細は、愛媛県新居浜市一宮町新居浜市役所商工観光課　近代化産業遺産全国フォーラム実行委員会事務局　TEL0897-65-1260

全国近代化遺産活用連絡協議会シンポジウム

日時：平成12年11月21日～22日

11月21日（火）
シンポジウム「近代化遺産の保存と活用」
13時30分～17時30分

11月22日（水）
近代化遺産見学会

場所：シンポジウム
横浜市西区　パシフィコ横浜小ホール
見学会　横浜市関内地区・山手地区

詳細は　東京都千代田区丸の内3-4-1新国際ビル810（財）日本ナショナルトラスト
全国近代化遺産活用連絡協議会事務局
TEL03-3214-2631

土 木 史 関 係 図 書

書名	著者・編著	発行所	定価	備考
国土を創った土木技術者たち	国土政策機構編	鹿島出版会	2,100	明治以降から高度成長期以前までに活躍した土木技術者35人の人物像。
庄屋日記にみる江戸の世相と暮らし	成松佐恵子	ミネルヴァ書房	3,500	美濃国安八郡西条村の庄屋西松家が書き残した日記に焦点を合わせ、当時の社会史、生活史を考察。治水と輪中の暮らしなども触れられている。
平野与十郎幕末・維新日記	桑原真人・田中彰編著	北海道大学図書刊行会	7,500	神奈川台場、築地ホテル、新橋・品川間鉄道工事、札幌本道の開削など、幕末から維新期にかけて活躍した土木請負人平野与十郎が記した60年にわたる日記を解読した書。
建築・土木365日「今日は何の日」	菊岡倶也編著	彰国社	3,000	我が国の土木・建築の歴史を1月1日から12月31日の「365日」で記述したユニークな書。
江戸はこうして造られた	鈴木理生	ちくま学芸文庫	1,100	徳川家康が江戸入りして以来の百年間の都市形成の謎を解き明かす。「幻の江戸百年」('91年、筑摩書房)の文庫版。
柏原市文化財概報1999-「文化財基礎調査概報-近代化遺産-」(注)	柏原市教育委員会	柏原市教育委員会	750	柏原市内に残る、明治中期から昭和初頭までの橋梁やトンネルの資料が中心。すべての資料について所在地位置図、カラー写真が掲載され、現状についても詳しく説明している。A4版18頁。

注)現在の残部は50部ほどです。現金にてお申し込み下さい。
申し込み先は下記の通りです。送料210円。
〒582-8555　大阪府柏原市安堂町1-43
柏原市教育委員会社会教育課

編集後記：今年度も土木史フォーラム小委員会には、多くの新任の委員の方をお迎えし、10名の地域委員を含めて総勢22名で運営をしていくことになりました。今後とも土木史フォーラムをよろしくお願い申し上げます。また退任された委員の方には長い間ご尽力を頂き有難うございました。

15号では西田橋や東山道武蔵路などのように、これまでも記事として報告のあった件について、その後どうなっているのかという紹介がございました。他にも既に報告のあった土木遺産の保全や活動等について、何か新しい動きなどご存知でしたら、地域ニュースへの投稿というかたちで読者の皆様にも積極的に参与していただければ幸いです。連絡は下記の事務局までお願いします。もしくは、土木史フォーラムホームページに記載された地域ニュース応募書式を御覧ください。
(http://www.city.civil.saitama-u.ac.jp/chsce/obo/obo.html)

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム　No.15
発行者　土木史フォーラム小委員会
代表者　窪田　陽一
事務局　埼玉大学工学部　深堀　清隆
〒338-8570　埼玉県浦和市下大久保255
TEL　048-858-9549／FAX　048-858-7374
Email:fukahori@post.saitama-u.ac.jp
URL:http://www.city.civil.saitama-u.ac.jp/chsce/newsletter.html

CONTENTS

- NEWS		
Removal and re-erection of "Nishidabashi bridge" in Ishibashi memorial park.	HASEBA Ryoji	**1**
- FORUM		
Report on modern civil engineering heritage.	HANZAWA Yoshio	**2**
- LOCAL NEWS		
Preservation work of the road heritage "Tozando"	TAKEBE Kenichi	**3**
Preseravation of Nobiru port heritage and revitalization of local community	GOTO Koki	**3**
- OVERSEAS NEWS		
Report on ICOHTEC'99.	KOBAYASHI Ichiro	**4**
- RELEVANT INSTITUTIONS		
The forum on heritages of civil engineering	KUBOTA Toshio	**5**
- HERITAGE REGISTRATION LIST		**5**
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
Admiration of civil engineering heritage by CHSCE and publication of "Modern civil engineering heritages in Japan"	BABA Syunsuke	**6**
Committee member list		**6**
Call for papers of the 21th conference of CHSCE		**7**
- WHAT'S On		
Forum on modern industrial heritage		**7**
Symposium on utilization of modernization heritage		**7**
- BOOK GUIDE		**8**